パチンコ依存 第12回

新「相談現場からの報告」

柏木勇一
産業カウンセラー・家族相談士

家族の中に問題があり そして家族に救われる

身近なハイキングコースとして人気が出てきた高原地帯に工場があった。首都圏から車で2時間弱とそう遠くはないのも魅力。ごく普通の農家が多い古い町だったが、最寄りの私鉄駅の運行本数が増えるにつれて、周辺も〝都会並に〟賑やかになってきたという。

建築士の試験に失敗し大手系列の工場へ就職

精密機械を作る工場が進出したのは、周辺が観光化する以前の15年ほど前で、町が森林を保護しながら工業団地を作って誘致した。四季折々の景色に恵まれ、すがすがしい大気に包まれている環境は、精密機械やIT機器製造にはうってつけだった。

初秋の平日の午前11時、駅に近いファミリーレストランでAさんに会った。開店直後ならまだ客も少ないだろうと思った。喫茶店のチェーン店も進出していたことを事前に聞いていたが、じっくり話し合う場にはふさわしくない。駅前の商店の並びは、奥行きはないものの、首都圏によくある風景。ラーメン店や居酒屋ののれんと共に、当然のようにパチンコ店の看板が目に入った。

30代後半ということは知らされていた。携帯電話に応じて姿を見せたAさんは半そでのポロシャツ姿。ファミリーレストランの入り口のレジから一番遠い席に座った。Aさんはこの町で生まれ育ち、電車通学で工業高校から専門学校を経て設計見習いとして工務店に就職した。

しかし、建築士の資格試験は何度受けても失敗。職場の目も気になり、10年前に転職した。ちょうど工場が業務拡大のため中途採用者を求めていた。大手企業系列の工場への就職は、家族も歓迎した。ここまでの情報は事前の電話で聞いていた。2年間の契約社員期間はあったが、もう工場では〝10年選手〟で貴重な戦力だろう。

健康だが休みがちで保健師が心配し仲介

Aさんとの面談は工場の保健師からの仲介だった。従業員の健康データを管理している保健師は「この2、3年休みがちになった。毎年有休を使い切っている。上司も同僚も困惑している。明るい性

格でなぜなのか分からない。2交代で夜勤もあり、毎年2回健康診断を実施しているが、ずっと異常はない」と語った。保健師は多忙な上司に代わっての従業員対応だった。もちろん人事部の了解も得ているし、月1回訪問してくる産業医にも話していた。何かあれば産業医面談につなげることもできた。

他人と会うことはあまり経験がないのだろう。最初の会話はぎこちなかった。それでも、照れるような笑いは絶えなかった。経験10年で30代後半。肩書がついているのだろうと思って質問した。答えは「ずっとヒラです」とちょっとうつむきながら声を出した。「そうだったの?」とコメントをしないで聴いた。次に何を話すか、待つ時間を設けた。ちょっとした沈黙が良かったのだろうか。Aさんの口が滑らかになった。次のような会話が続いた。こっちは簡単な誘導の言葉しか出さなかった。

細かな仕事は正直辛くて田舎に帰った方がいいか

「本当はこの会社に入りたくなかったんです。細かな仕事は苦手でした。パソコンのスキルも上達しません。建築士にもなれないのに、難しい仕事の工場に入って、実力がないまま働くことは正直辛かったんです。たまたま人手がほしくて拾われたんです」

「ここに転職が決まった時家族も喜んだんじゃなかったのかな」

「ええ。それはそうでした。自分も田舎育ちなので家を離れて遠くに行くことは嫌でした。同級生の中には都会に憧れて出ていった人が多かったようです。ただ…」

「ただ?」

「結構戻ってきた人もいます。自分には向かないって」

「戻ってどうしてるのかな」

「農業を継いだ人もいますが、とび職や塗装業などが多いです。自分もその方が良かったのかな、ずっと考えてきました」

「そうだったんだ。家族は?」

「両親と兄がいます。父は個人運送業です。運送会社から独立して自家用トラック一台で建築資材を運んでいます。組織にいるのが嫌だってずっと話していました。景気次第で波はありますがそこそこやっているようです。母は糖尿病で最近は腎臓も悪くなって病院通いです」

兄に誘われるようにホール通い始めたが

「お兄さんも一緒にいるの?」

「40歳で独身です（ちょっと笑って）別に仲は良くも悪くもないのですが、なんだかみんな似てます。兄も職場を3回替わっています」

「いまは落ち着いているのかな、お兄さん」

「うーん、製造会社の倉庫管理って言ってました。ちゃんと出勤はしているようですが、いつまで続くか」

「どうして?」

「クセが治っていないんです。パチンコの」

「パチンコ?」

「ええ、実は…わたしも…」

ちょっと急な展開になったが、相談の内容が分かってきた。

「兄を見ているうちに自分も誘い込まれるように通い始めました。店はそんなに多くはないので同じところが多かったのですが、それでも兄や仲間と一緒にはならないように気を遣いました。ちょっと車を飛ばせば近隣にはいくつか店はありますから」

そう語り始めたAさんの3年近い〝パチンコ歴〟は次のようになる。ひどい依存状態ではないが、泥沼にはまり込む要素は十分だった。しかし、意外なことで這い上がることができた。

出勤した駐車場で突然吐き気に襲われて欠勤

仕事が自分には合わない、といってまた転職するのか、もう30歳も半ばを過ぎた…などを悶々と考える毎日。ある朝マイカーで通勤、工場から50mほど離れた駐車場のいつもの場所に車をとめた。正式ではないが、それぞれの駐車場所は何となく決まっていた。ドアを開けてさあ工場へと思った時、言いようのない吐き気に襲われた。

草むらに向かったが実際に吐くことはなかった。むかむかした気分はおさまらなかった。すぐ携帯でリーダーに連絡した。「そこまで来たのにダメか」という返事だったが、「気をつけろ。帰って休んでいい」と欠勤を許してくれた。そのまま帰宅。家には母だけがいた。母の病状は改善されないので、あまり家事もできない状態だった。医者からは「薬だけに頼ってはいけない。食事と運動療法を心がけ

るように」と忠告されていたらしいが、どうみても自分から行動する気配はなかった。

「仕事はどうした」という母の声が聞こえてきた。返事もしないで2階の自室に入りベッドに向かったが、吐き気は全く感じなかった。何もする気がしないので、何となくゲームを始めた。仕事をしない自分を責めるよりも、このほっとした時間を持てたことが気分を落ち着かせた。

同じ繰り返しの心身症もホールへのドライブ快適

ウソを言って休んだわけではないが、次第に同じことを繰り返すようになった。駐車スペースにマイカーを入れた途端にこみあげてくる吐き気と仕事への拒否感。作業場に向かわないと症状も出ない。ストレスが引き金になっている身体の症状、つまり心身症なのだが、そのからくりは分からなかった。

家に帰ってもゲームだけ。それもつまらない、と感じ始めた時向かったのがパチンコだった。職場のみんなも結構遊んでいることは知っていた。といって、依存状態までのめり込んでいる話は聞かなかった。上手にやっているのか、恥ずかしいから黙っているのか、などと考えながら店を探した。夜勤明けのメンバーが通っているかもしれない、と考えたAさんは少し遠くに車を飛ばした。

日中の運転も気持ちが良かった。酒は飲めない体質だったので飲み仲間もいない。趣味と言えばドライブ。何処へ行っても四季折々の景色の変化は魅力的だった。ひとりで味わえる開放された世界だった。

嫌な仕事を忘れられる兄と同じで家系なのか

周囲に知りあいがいないパチンコ店もまた同じようにひとりだけの空間。地元から離れた、合併で市になった隣町に向かうようになった。どの店も客の入りはまずまず、という印象。女性客や年配男性が目立った。暇な人が多いんだな、お金は大丈夫なのか、などを考えながらも、自分もすぐに快感にひたっていった。

何よりも嫌な仕事を忘れることができた。これなら兄貴もはまるわけだ。やっぱり血は争えないのか。そういえば親父も会社が嫌で独立している。我慢できないとすぐその場から離れるのは父親譲りなのかもしれない。兄貴と同じことをやっている自分を責めつつ、仕方がないか、と勝手に安心させた。

そういえば兄貴はよく親父と言い合いをしていた。親父から大声で叱られることが多かった。一か所に落ち着かず転職を繰り返している生活態度をこっぴどくやられたと思っていた。いま思えば「金の面倒は見ないぞ」という親父の声もあった。

ひょっとしたらパチンコ代を無心していたのだろうか。親父と兄貴がその後どうしたかは分からない。お互いあまり干渉しないことにしていた。40で独身。彼女がいるのかどうかもつかめない。親父もおふくろも、もうあきらめたのか話題にもしなくなった。自分にもはねかえってくる話だ。

職場でも「疑い」の叱責逃げるだけの自暴自棄

週1回から2回、3回と増えていくパチンコ通い。急に腹痛がひどくなった、とウソを言って仕事中に逃げ出したこともあった。休んでも有休扱いにしていたので、深夜勤務手当は少なくなったが給料はまずまず。しかし、資金の限界は見えていた。本当に体調が悪いのか、職場でも疑いの目で見られ始めた。上司からは「お前の年齢ではみんなリーダーに昇格している。やる気があるのか。病気ならちゃんと医者に行け。会社は甘くはないぞ」と言われ、もうここにはいられないな、と思った。

勤怠が響いて昇給もなく、いよいよ苦しくなった。有休も残り少ない。これからは欠勤したら給料が減るだろう。好きな車の維持費にも影響が出始めていた。会社を辞めたい。しかし次の当てもなく辞められない。ちゃんと休まないで仕事をすればいいことは自分が一番分かっている。それができない。だらしない自分を責めたが、這い上がることはできなかった。ますますパチンコに逃げた。自暴自棄になっていた。

会社を休んだある日、大雨が降っていた。行こうと思えば行けないわけではなかったが、パチンコ

も休んだ。ここまで追い詰められたら仕方がない。明日、消費者金融の窓口に向かおうと真剣に思った。1回だけ、1回だけならいいだろう、と何の根拠もなく自分に言い聞かせた。

糖尿の母が意外な頼み「一緒に歩いてくれない」

その時、珍しく台所にいた母から呼ばれた。父も兄も自分もみんなバラバラの生活なので一緒に食事をする日は少ない。それぞれが勝手に食べるのが習慣だったが、おかずの一品、二品ぐらいは母親が準備していた。自分の体調に合わせて味が薄い母のおかずは好きではなかったが、下ごしらえと思えば助かった。その母親の言葉は意外な内容だった。

自分もこれ以上身体を悪くしたくない。医者が勧める運動療法を始めたい。といって特別なことはしなくていいし、いきなり何ができるわけではないだろう。とにかく歩きなさい。毎日ですよ。ときつく言われたことを明かした上で、「しばらく一緒に歩いてくれないか。ひとりでは続ける自信がない」という誘いだった。お前は最近会社を休む日が多いようだ。どうしてか理由は聞かない。勤めていたころの父さんだって兄だって同じだったから。助けると思って願いを聞いてくれないか。入院するのは嫌だから。

母と子の散歩は続いた 親父から感謝の言葉が

朝5時半起床。母が簡単な朝食の準備をした後の6時から30分ほど、一緒に自宅周辺を歩き始めた。夜勤明けで眠い時もつきあった。ウオーキングといえば聞こえはいいが、母子一緒の散歩。不格好な母と若くはない息子の組み合わせ。周囲には家も少ないが、すれ違う人がいないわけではない。仕事に向かう服装の人もいた。ただ誰も気にする風はなかった。

むしろ、何人か颯爽と歩いたり走ったりしている人がいた。Aさんは改めて健康ブームが自分の住む地域にも広がっていることを実感した。世間知らずだったな、と正直に思った。

雨の日以外は母と子のウオーキングは続いた。30分が45分、1時間と伸びていくのに時間はかからなかった。黙って様子を見ていた親父の顔にも次第に笑いが出るようになった。どうせ長続きはしないだろうと思っていたに違いない。Aさんは親父から感謝の言葉をかけられたという。親父との会話らしい会話はいつ以来か。

追い詰められた兄の話を 母はきつい言葉で語った

Aさんは歩きながら母親にパチンコにはまってしまったことを白状した。歩くリズムを守ったまま、母親は何となく気づいていたと答えた。やっぱり、隠せなかったか、家族だからな、とAさんは思った。途中、小さな公園のベンチに座った。

母はいきなり「金は大丈夫か」と切り出し、Aさんが返事を渋っていると「（兄の名前を出して）あいつは結局借金をして追い詰められた。1回だけ夫が清算した。またやったら家を出ていけと怒鳴られた。言い合いはお前も聞いたことがあるだろう。多分止めただろう。今でも少ない給料から毎月少しずつ返済しているはずだ」と明かした。続けて「もう家には余計な金はない」と、母にしては厳しい表情で語り、すぐ立ち上がって早足で歩き始めた。

このような朝の日課がAさんの行動を変えていった。パチンコに通う気分にならなくなった。Aさんは何となく家族の一体感のようなものがあるという感じも持った。

もう40歳を前にした男のこれからの人生についてアドバイスが欲しいという本当の相談目的にたどりついた。アドバイスが効果があるとは限らない。Aさんの場合も、それぞれが苦労を重ねてきた家族の中に打開策があるだろう。そんな考えを胸にして、聴き役になって雑談に応じた。

柏木勇一（かしわぎ ゆういち）

大学卒業後、会社勤務を経て、現在はEAP企業（Employee Assistance Program）でカウンセラー及び研修講師として活動。
厚労省認定産業カウンセラー、キャリア・コンサルタント、家族相談士、交流分析士